第11回熊本市歴史まちづくり協議会 議事録

【日　時】令和7年（2025年）3月28日（金） 午後2時30分～午後4時30分

【場　所】市民会館シアーズホーム夢ホール2階 第5・第6会議室

【出 席 者】8名出席　※以下、敬称略
委員 鄭　一止 （会長）、大森 洋子、小粥 祐子、小林 寛子、松﨑 範子、舟津 紀明、
早川 祐三、宮本 茂史

【議　題】
1 歴まち計画の進捗管理・評価制度について（報告・振り返り）
2 令和6年度の進捗管理・評価について（報告・意見聴取）
3 令和7年度の主な取組について（報告・意見聴取）

【概　要】
進行管理・評価について事務局で説明後、意見聴取を行った。委員から出された意見は以下の通り。

1.文化財保存活用地域計画について

・文化財保存活用地域計画の策定には2,3年はかかると思うので、歴まち計画の修正を含め、個別の史跡の保存活用計画と合わせて、現実的にいつまでにできそうなのか、ロードマップを検討する必要がある。
・地域の歴史文化の特性の検討について、熊本における現状の整理から入ると思うが、まとめていく前提、大きな位置づけとして、京町・坪井地区など城下町にかかわる地域も含めていくのは検討に値するのではないか。

2.伝統文化を反映した活動の継承について

・郷土文化財の認定について、地域に残っているお祭りを大事にしていくのは素晴らしい。
・市職員が積極的に文化財に関わるような事例を見つけ、守るために自主的に動いている。地域からの声という部分もあるが、市職員の選眼力があって、この制度が成り立っていると思う。
・コースターやクリアファイルのPR商品の出来栄えはとてもよいので、広がっていくと市民もお祭りを認識し、いいものだと思ってもらえるのではないか。
・お祭りの把握の調査も重要だが、どの地域も担い手不足であるので、後継者を育てる支援などに力を入れてほしい。本来は地域で後継者を育てていくものであるが、できなくなっている部分もある。学校教育の中や地域学習の中で、大事なものをきちんと伝えていくシステムを支援してほしい。

3.歴史的風致を活かした観光振興について

・お祭りは、ほとんどがそもそもその地域にいる人たちのための豊作を感謝して、お祭りという形で神様に奉納するということであるので、外に向けて発信するものではないと思うが、地域のお祭りを見せ物としてではなく、地域の資源として紹介するという方法で、その地域の価値を説明しながら、お祭りを体験してもらうという仕組みが大事。
・海外の人にとって、神楽などのお祭りは超一級の文化資源の体験になる。
・お祭りと体験を求める人とをつなぐコーディネーターがいれば、地域外からの人流や資金流入が見込める。
・活用しない限り保存するお金が生まれない。保全・保存と活用とを一緒に考える必要がある。
・通訳案内士が通訳してくれるインバウンド用プログラムを複数つくり、オンラインで選択して予約できるというようなすべてのコンテンツが連動するシステムがあると、今あるプログラムを活かすことができ、地域にお金が残ることで保存につながり循環することになると思う。それぞれを繋いでいく作業は難しいとは思うが、すべてのコンテンツが連動するシステムがあれば、修学旅行など教育プログラムに活用できる。
・現在はインバウンドの時代であるので、お城と城下町を身近に見ることができて、そこに実際に住んでいる人が話をしてくれるといった体験を、いろんな属性の人たちができるようにするとよい。
・イベントをすると、その都度ある程度の人は集まるが、イベントがなくなると人がいない状況に戻ってしまうので非常にもったいない。頑張っているのはすごくいいことなので、継続してよい方向に循環してほしいと思う。
・観光のプログラムは、多言語化、時間ごと、フットパス、プチツアーのように複数のパターンがあるとよい。
・すべての情報が網羅されているホームページができると、1回で検索できる。
・通訳案内士やガイドの方たち向けに、熊本の歴史・文化について共通のマニュアルが必要。そのために必ず伝えるべき、ここだけはちゃんと伝えなければいけないという基礎情報やコンテンツの整理が必要。
・ガイドは、ただマニュアルを見るだけだったり、棒読みされたりしても全然伝わらない。優れたガイドの一つの要素は伝える技術。お客さんのニーズに合わせて楽しみながら伝える技術も必要。
・熊本がどういう地域なのかを説明するうえで導入部分としてのコンテンツが整理されれば、ガイドだけでなく、ガイドブックを作る人、マップを整理する人、お土産物を考える人、イベントを作る人も出てくると思う。関係部署との連携をもっと図る必要がある。
・年間通じてどんなことが熊本で起きていて、熊本の歴史がどんな風に生まれてきたのかということを、目の前にあるお城を見ながら、いろいろ思いを馳せてもらうようなコンテンツがあると、城下町・川尻の重要さも伝わりやすくなると思う。

4.歴史的建造物の保存・活用について

・本当に歴史を伝えているものは本質的価値としてきちんと、市民から海外の人たちまで、たくさん伝えなければならない。
・観光資源として活用するためには、本質的価値にこだわっていると活用ができない。文化財保護委員と観光資源として回していきたい人たちとのせめぎあいになる。
・歴史的なものが残っていなければ活用していくことができないので、町屋をどう残していくかが重要。関係者の中で町屋の情報を共有していく必要がある。

・町屋の情報は個人の情報が入っているので、すべてを公開はできないと思うが、活用の方法や見せ方を調整していく必要ある。
・ヘリテージマネージャーとの連携が重要であり、次の世代を育てることも重要。
・町屋の所有者で後継者がいない方や後継者で建物に価値を見出していない方と、定期的にコミュニケーションをとり残してもらえるように意識を向上させるなど、地権者の方、所有者の方の意識を変えていかないといけない。
・一方的に、町屋を所有されている方を表彰するなど、町屋の所有者の意識の向上につながる制度は考えられないか。
・オープン町屋のように年に1回、普段見られない部分を公開してもらい、いろんな人に見てもらうというのは、所有者に誇りをもってもらうチャンスになるかと思う。

5.歴史的風致の情報発信と情報共有について

・補助事業の成果を共有する、勉強会やお披露目会をしていただきたい。熊本市だけでなく、同じ歴まちの都市や全国に発信することで、広がりや、観光資源として活用できるのではないか。
・助成した町屋以外にも、どの程度町屋が残っているのかの情報は共有してもらいたい。
・近くの地域で共通の課題をもっている市町村と情報共有や勉強会を持ち掛けてはいかがか。